

日本気象学会

北海道支部だより

昭和40年8月

N6.5

支部理事補充さる

4月の人事移動に伴う理事の転出に対して補充選挙を行い、さらに常任理事は理事会の互選を経て支部理事の構成は次のように決った。

個人情報保護のため公開していません

支部規約・支部選挙規約一部改正

これについて支部理事会の議決により〔別項；支部理事会報告（40年度オノ回）〕7月19日付文書で投票により改正の賛否を求め、賛成116、（うち条件つきノ）、白票ノ、反対なしで承認された。改正項目は下記のとおり。

1. 支部規約の第八条「幹事2名以内」を「幹事4名」と改正する。

改正理由

当学会支部では、実務は大部分幹事が担当しているが、幹事数が理事数に比して少ない。現在は幹事2名は事務局1名、大学1名となっているが、特定幹事に実務が集中して繁忙になるのをさけ、または学会支部活動をより活発にするため幹事を4名に増員したい。

2. 支部役員選挙規則の第五条

「理事に欠員を生じた場合の補充は次点者をあてる」を次のように改める。

理事に欠員を生じた場合の補充は次の方法による。

1. 欠員は最初のノ名に限り次点者をもつて補充する。
2. 2人目の欠員は補充しない。したがって2名同時に欠員を生じた場合はそのうちのノ名だけを次点者をもつて補充する。
3. 補充のほかにも2名以上の欠員を生じた場合は補充選挙を行う。

3. 支部選挙規則に新たに次のオノ条を設ける。

支部選挙における次点者とはノ名である。

得票数が同じものか2名以上でた場合の順位は

年長順とする。

2.3の改正、新設の理由

理事欠員の場合の補充方法、次点者の解釈が明確でなかったため。

日本気象学会北海道支部 39年度会計報告

	期 日	金 額
収入の部		円
繰越金	(4月/日)	49,036
入会金(4名分)	(6.17, 6.22, 8.28)	400
本部よりの交付金	(6.17, 7.17)	26,000
		計 75,436
支出の部		
郵送料	(4.16, 6.6, 7.15, 7.20, 8.3, 2.4)	720
用紙類購入費 (西用紙・封筒等)	(12.15)	760
支部選挙文書印刷紙	(6.16)	1,200
支部よりNo.4印刷費	(9.15)	6,000
理事会会議費	(6.2, 7.30, 3.24)	11,755
国祭雲物理会議費	(1.21)	2,000
		計 22,435
40年度へ繰越金		53,001

詳細は支部理事会にて報告、承認された。

北海道支部理事会報告 (39年度才3回)

期日 昭和40年3月24日

場所 サツボロビル直営別室

出席者 神原 健, 孫野長治, 日下部正雄
唐津 進, 井上力太, 淵本 一,
小林禎作, 岡林俊雄

議事

1. 理事退任に伴う補充について

3月末をもって淵本理事は退任、日下部、唐津理事は転出する予定なので、選挙の次点繰り上げは1名のみと解釈し(すでに次点者の黒岩太助氏は繰り上げて理事に就任済み)、3名の理事補充選挙を4月中に行う。

また、これを機会に次点者の定義と、同時に多数の欠員を生じた場合の補充の方法を規約上はつきりとさせることにする。

2. 学会支部の事務打ち合せ

ア、会計中間報告(幹事)。次の支部だよりに公示する。

イ、地方理事が理事会に出席するときの旅費援助を話題にしたが、保留、見送りとなった。

3 国際雲物理との関連事項

唐津理事より、国際雲物理会議の募金予定額と状況の中間報告あり。

4 支部だよりの発行について

次号No.5は3月中に出すのが好ましいが、雲物理会議で多忙なことから、雲物理札幌大会の記事ものせる意味で、雲物理会議終了後とする。

理事会終了後、日下部、唐津、淵本理事の送別慰労会を行った。

北海道支部理事会報告 (40年度才1回)

期日 昭和40年5月2/日

場所 札幌管区气象台 有線現業室

出席者 神原 健, 孫野長治, 吉田順五,

黒岩太助, 小野寺昭夫, 小林禎作,

岡林俊雄

議 事

1. 支部理事補充選挙による就任確認

この選挙結果についてはすでに5月19日公表したが、淵 秀雄、小泉政美、小野寺晶夫氏の当選を発表し、就任を確認した。

2. 支部規約、支部選挙規則を改正することの協議

ア) 幹事を4名に増員すること

イ) 理事に欠員を生じた場合は次点者で補充し
その補充のほかに2名以上の欠員になった場合は補充選挙を行う。

ウ) 次点者の定義を明確にする。

これらについては支部会員に賛否を問うて規約改正するように事務を進める。

北海道支部理事会報告

(40年度才2回)

期日 昭和40年7月16日 於北大孫野教室

出席者 神原 健 孫野長治 吉田順五

井上カキ、黒岩大助、小泉政美

小野寺晶夫、小林禎作 岡林俊雄

議 事

1. 常任理事補充の互選

常任理事2名欠(日下部、唐津氏の転任による)に対して、小泉政美、小野寺晶夫氏が互選された。

2. 昭和39年度会計報告の承認

幹事より39年度の会計報告ありそれを承認した。会計報告内容は本誌別項参照。

3. 本年度行事予定(昨年度計画して延期になったシンポジウム関係分のみ)

ア) 電波気象(レーダーを含む)シンポジウムを10月下旬に予定、講師は札幌管区気象台、函館海洋気象台、北大(応用電気)などに依頼する。

イ) 大気汚染シンポジウムを11月中旬以降に予定、講師は札幌管区気象台、室蘭地方気象台、北大などに依頼する。

随想

二つの立場

支部長 神原 健

私は昭和8年以来の気象学会員であるが、学会関係の役職に就いたのは今度(もう昨年になるが)がはじめてである。私は気象庁の幹部の中では最も学会的でない人間と考えているので、過去においては学会の役職は意識的に避けてきた。

しかし、本当はそれだけではない。本心は気象庁の幹部という立場と学会の役職、という立場は異質なものと感覚的に受取っていたし、それを使い分けられる器用さをもつていないと目認していたからである。だから昨年、支部の理事を、引続いて支部長をお引受けした時も、それが便宜的事務によるものであることを十分承知しながらも、どうもスッキリしなかった。

こういう私の気持ちに極めて明解な答えを与えてくれたのは次の話である。過日、北大のH教授と雑談を交している時、同教授は『研究費獲得の際などに、何がインポートかが問題になるが、それは間違いだ。研究者にとつては何かインタレスティングであるかが総てである』と。誠にその通りである。学問はインタレスティングによつて進歩するのだ。

学会はインタレスティングの側にある。これに対して私の気象庁における立場は常にインポートのサイドにあるのだ。二つの立場は相互依存の関係を生ずる場合もあるが本来は別の次元にあるのだ。

尤も学会員のすべてが純粋にインタレスティングのサイドにあるかどうかは疑問であるが、

国際雲物理会議札幌大会集

札幌セミナーをふりかえって

北大地球物理 孫野長治

札幌セミナーはスケジュールどおりに滞りなく終了した。はたからみれば当然のことかも知れないが、ホステスの側からは一同このために大変な気苦労をした訳で、その立場からセミナーのあとをたどつてみたい。

5月31日13時30分、正確に内外の参加者が北大クラーク会館に姿をあらわしたのでほつとした。千代空港到着以来少しづつおくれ気味で気をもんでいたが出迎え関係の努力の賜と考える。

14時、北大杉野目学長の挨拶までの僅かの時間に参加者がどやどやとローンの上に出て日光浴とおしゃべりを始めたので、地下の会場に再び押し込めるにしのびなかつたが、スケジュールを守るためには心を鬼としなければなるまい。

14時10分-15時30分 中谷静子夫人と英二子嬢の紹介。中谷先生の映画「Snow Crystal」, 「雪の華」, 「雪の結晶」, 東教授の解説による。

15時50分-17時50分 北大低温と気象学教室訪問。雲物理学会議の後半が北大に移された主な理由は、国外の参加者から「故中谷教授に敬意を表したいし、中谷の門弟がそのあとにやっているかを見たい」という希望が強かつたからである。低温では人工雪の表置とデモンストレーション、積雪及び氷の研究の展示、気象学教室では雪の結晶、雪雲及び雲のモデル実験を披露した。雲の実験は動きがあるので人気を博した

ようである。この点子快とそつくりである。

19時-21時 三愛ホテルで道知事及び札幌市長招待のパーティ。町知事が挨拶で「こんな多勢の外国人学者を迎えたのは始めてである」, 「雲物理学が北海道の開拓に貢献することを期待する」と述べたことは、至極当然のことかも知れないが、少しこそばゆい思いがした。参加者代表としてゴドスン教授(IUGG及びWMO代表)の謝辞を中谷英二子嬢が通訳をする手筈になっていた。あらかじめ内容をタイプに打つて手渡すことになっていたが、タイプライター用紙にぎつしり打ちこんであるのをみて英二子さんがさじをなげてしまったので通訳めきで話してもらった。かんじんの学会の講演でさえ飛び飛びにしか解らぬことが多いのだから、挨拶くらいはそれで充分であつた。

パーティーは非常にお気に召したらしく、酒もつまみもなくなり時間が過ぎても会場を立去らうとしないので、諾らぬ気のもみようもした。

6月1日9時-16時20分 セミナー
フレッチャー教授(ニューイングランド大)

氷晶化理論

メースン教授(インピリアル大)

氷晶と雪の結晶習性

リスト教授(トロント大)

雲の生成機構

スラハム教授(シカゴ大)

雪雲、雨雲の航空観測

孫野教授(北大)

日本の季節風時の降雪

10時—15時 レディースプログラム
フルーク博士の父君を含め総勢25名で藻岩、北海道神宮、植物園、景勝園のコース。なかなかの好評であつた。

6月2日9時—16時 クラーク会館で雷の電気発生に関する討論会。チャルマース教授の司会で非公式の故もあるが自由な討論がにぎやかに行われ、あとでこれくらい十分な討論ができたのは始めてであるとお賞めの語を承まつたが日本人は残念ながら聞き役に廻ることが多かつた。

18時30分—20時 北海新聞ホールでシェファー教授の人工降雨に関する市民講演会。おりからの雨の中を補助椅子も不足するくらいの聴衆がつめかけて大変盛会であつた。

6月3日9時 洞爺湖、登別方面一泊旅行に出発。直雨の風物を満喫して三々五々東京、名古屋、関西へと去っていった。

あとでボーエン博士、シェーファー教授、バイヤース教授夫人、ボネガット博士から札幌セミナーは大変よかつたと礼状が届いたことから今度の学会が成功であつたと考えてよいと思う。

日本人は学会等の運営に特殊な技能をもっているようである。それにしても今度の会議の成功は天の時、地の利、人の和の賜と感謝の念を表することができない。

実行委員の一人として

札幌管区気象台 岡林俊雄

1. 実行委員会(準備委員会)発足のころから

国際雲物理会議の札幌地区委員会は1964年の7月30日の支部理事会から発足し当初は

気象台 神原 健、日下部正雄、鷹津 進

岡林俊雄、有藤 実

北大 孫野長治、黒岩大助、樋口敬二(当時オーストラリア在住)、小林禎作、菊地勝弘

の10名であつたが、会期が近づいて実行委員会は拡大され、

庶務、財務、接待、映画講演、会場、展示、

インホームミーティング、一般講演(Schaefer博士の)およびレディースプログラム班

の9班を設置し、気象台は総務部、技術部あわせて31名、北大は学生も含め42名、計73名となつた。調査課は事実上総動員に近い態勢となつた。

2. ホテル、レセプション会場決定まで

札幌セミナー会場は北大クラーク会館と当初から決つたが、会場に入るまでのことはすべて気象台側、会場に入つてからは北大側という孫野教授の“巧みな”方針がうちだされ、早速外人用のホテルと、レセプション会場探しが始まつた。

札幌では最大級の三愛、ローヤルホテルをはじめ、外人の中には日本間を希望する人もあるだろうということで日本旅館も廻つた。最終的にホテル三愛と、山形屋、丸惣旅館の3つがえられた。日本旅館は各部屋がバス、トイレつきと限らないが、それも思いで話になるのではないかという意見もあつたが、やはり実際札幌について部屋に入つたとき多少スツスツという人が出たらしい。またホテルでは、札幌に限るまいが、食事の高い事に所口した外人もあつたらしい。

地方で会議を開くときいつもつきまとう問題であるが、東京方面からくる日本人の宿舎のお世話で、共済関係は早くから予約申し込みをしておかなければならないので20名分予約したが、結果的には6千数百円の違約金を事務局として払つたのは、小さいことではあるが残念であつた。

3 募金運動について

これだけの規模の国際会議になると本部からの交付金だけではどうしても足りないので札幌としても関係官庁、会社、産業機関の協力を求めなければならなかった。これについては日下部、唐津理事が80%台まで目標を達成していつてくれたことには大いに感謝した。4月の人事異動で両理事が転任になり、新たに小泉部長、小野寺課長が後任として委員になられた。

新任早々のご兩人をもり立てて募金にかけまわる役目は、ご兩人もつらかつたろうが、どうみてもよい役目ではなかった。しかし小泉部長方の人徳もあり目標を達成できたことは何よりであつた。

寄付依頼にいくと、必ずといってよいくらい聞かれることは「何社はいくら出したか」ということで、会社によつては「あの会社はこれだけだそうですね」と事前に調べていて先手を打つてくるところもあつた。こちら側のアピールで何といても一番ききめのあつたのは「北海道としてはこれだけ多数の外国学者が集まるのははじめてであるので」という言葉であつた。

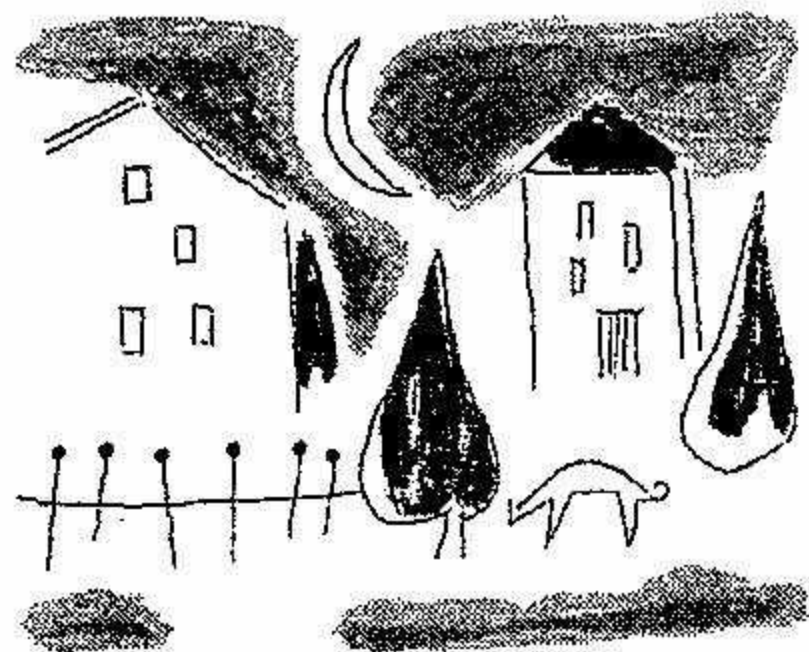
道と市が大幅に協力してくれたのは当然かもしれないが有難かつた。とくに市は再三の交渉に応じて、千代空港から札幌入りの輸送を市として歓迎の意味で引き受けてくれたり、委員の市内交通用として全線バスを出してくれたりいろいろ気を配つてくれた。百貨店協会もよく協力してくれた。

宿泊の人数が一番多く、レセプション会場にもなり、商売がら当然かもしれないが、ホテル三愛もかなりよくやつてくれた。

4 雑用係として

委員であつた部課長と、調査課としては大幅な人事移動があつたことと、大学との連絡の関係で、いきおい私が雑用係のセンターとなり内外とも多忙な立場に立たされた。しかし何といても嬉しかつたのは、総務部、技術部一体となつての運営体勢で進んでくれたことである。用催地が2ヶ所でそれがかなり高れている場合はどうしてもおこることだが、たとえば外人用宿泊事務をおおせつかりある程度進んだところで本部からそれは交通公社に任せるという方針が入つたり、札幌のみのParticipant（参加者）は東京とは別扱いにするということで文書事務を進めていると、東京、札幌一本化するので札幌のみの別扱いは認めないという方針が飛びこんできて、内心アタマにきたこともあつた。しかし、それもよく考えてみると本部の方針の方が総括的見地からよかつた。

会期直ぐになつて、道から知事のレセプションの挨拶の中に、学会として入れてほしい事項を文書で出してくれということになり、その原稿づくりをやらされたが、その中に「北海道における雪物理の研究は積雪寒冷地としての本道の開発に寄与するところが多いたろう」という文句を入れたが、それが多少変形された表現になつたが採用された。事実そう思うが、聞いてこそばゆかつた人もあるかもしれない。



5. 外人と旅行を共にして・英会話について

6月3日からの登別、洞爺方面の1泊2日のバスでのエスカーションに、学会支部としての付添として参加した。私としてははじめての経験なので比較はできないが、やはり、学者であるせいかなどかは知らないが紳士的なふん囲気であつた。いちばん行儀の悪いのは私だつたかもしれない。藻岩山頂まで来てバスに酔つたのか、Byers夫人が旅行を中止してハイマーでみき返した以外は全員最後まで元気だつた。

要所 要所でバスを停車させて写真をとつたが、停車時間の制限をあまりうるさくいつたせいか、はじめのうちはフースー口を鳴らす人がいた。とにかく事故のない様時間スケジュールは正確にしなければならないと思つたので遠慮しないことにした。2日目になるとその気持ちを察したせいかフースーいわなくなった。

Please take a photograph (picture) but within two minute というとニヤニヤ笑う人もでるようになった。写真はずいぶん撮つたようだ。しかし日本人ほどでないかもしれない。

このコース中外人が一番興味をもつたのは日本の田植祭だつたらしい。たしか室蘭から白老にうかう金中だつたと思う。この時はついに時間を超過してしまつた。室蘭港を通過するとき、室蘭港で大爆発をおこしたあのノールウエーのタンカーハイムバルト号がまだ燃えていたことが今でも印象に残っている。

洞爺湖の朝は素晴しかつた。羊蹄山の丁度真上にみごとなレンズ雲ができていた。ホテルの人もこんなきれいな形は珍しいといつていた。雲物理メンバーを歓迎したのかもしれない。私が *Lenticularis cloud* (レンズ雲) といつたら *Cap cloud* という外人がいた。俗名かまたは

丁度山の真上にできたので軽い気持ちでいつたのだろう。

中山峠も、洞爺湖畔も登別の地獄谷も景色、設備もすばらしい印象だつたらしい。だが、それぞれのところにある公衆便所から用をたして出て来るときの外人の顔はきつかつた。

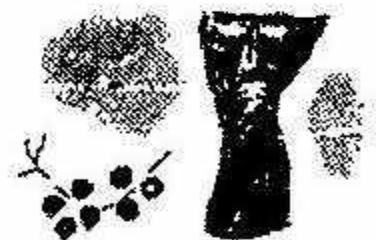
英話会話について

とくに日常英語会話について感じたことは、まず自分は英語は下手で *broken English* だということを手相に認識させることが賢明だと思つた。ペラペラ……ときたときハズといつたり頭をたてにふつたりしたい気持ちにかられるが、その気持ちを抑えることだ。そして逆に自分の下手なベースに相手を引き入れることではなからうか。それから

well, see, take, have, get 等の基本的単語の広範囲な活用は十分学んでおく必要があるようだ。たとえば *well* は名詞、形容詞、副詞、接続詞として品種が多いから当然かもしれないがそれはよい、十分に、まあ、へえー、やれやれ、なるほど、そうね、さて(それでは)、ところで、いやもう……等々

実に広範囲に使われる。*take, have* も同様でせう。しゃべるほうはとにかく何とかなる。やはり聴くほうが問題である。札幌セミナーも外人の講演は完全には解らなかつた。70%理解できたかどうかあやしい。自分でそう思っているが、あるいはこの70%もあやしいかもしれない。

楽しかつたエスカーションも終着に近づき、終点の千代笠港で名残りを惜んだが、私は、さようなら、ありがとう、大へんよかつた、とつとめて日本語でお別れした。



外人を家に接待して

北大地球物理 菊地 勝弘

ひよんなことから、リンフィールド大学のデイ教授が札幌セミナーも終った6月2日の夕食を、大麻団地の2Kのアパートで共にし、そして泊り、翌3日の晩はウッズホール海洋研究所のフランチヤード博士が夜遅くまですき焼をつつきながらダベつて行つた。それはまったく本当にひよんなことからだつた。僕は勿論、ご両人と面識があつたわけでもないし、手紙のやりとりもなかつた。たゞ、フランチヤードだけは、彼の数多い気象電気に関する論文を通してのみ知つていたということになる。それではデイはというと、今度の国際会議に出席する一週間ほど前に、研究室の雑談会で彼の論文を紹介した。それは最近の僕の研究にも幾分関係していたものだつた。たつたそれだけで前会式前の受付で親しく(?)なつてしまつた。その後顔を合わすたびに、彼は白い部分がずつと多い一見大工利(いや失礼)の頭に手をやつてほゝえみかけた。会議もなかばになつたある日、札幌行の話になつた。彼は勿論札幌セミナーに参加し、道南旅行にも行くと張り切つていた。

その時、何かの拍子に彼はホッスス博士と一緒になんだが、彼は低温研究所の小林博士の家に泊ると云つていたと切り出した。その時どうした訳か、あなたも日本の家庭、習慣の中に入つてみたいと思ひますかと云う氣になつた。(それは外人が僕の家泊つたらどうだろうかという僕の一連の子供じみたアバンチュールみたいなものだつたのかもしれない。) デイはニコリとして即座にサンキュウ。といういきさつであつた。フランチヤードとデイは研究を通して仲が好かつたようだ。フランチヤードとは初日のレセプションで孫

野先生に紹介してもらつた。とても気持のよいアメリカ人だつた。デイとの話が成立した。3日後に、彼は僕に「デイが泊るんだつてね」ときた。話をしているうちに「あなたも泊つたら」ということになつて、またフランチヤードのサンキュウを聞いた。日本の家庭、習慣と大きなことを云つたが、こちらは2DKのアパートだ。ましてやガイドブックに書いてあるような日本式(?)なことが何一つできない。「だがまあ、これが我々クラスの本当の日本の家庭かもしれない。」ときたるべき事件(?)に胸がわくわくした。

6月2日の朝ワイフにできたなら今夜は和服を着ていて欲しいと云つて出た。夕方まで気象電気のインフォーマルミーティングがあり、そのあとはシエーフアー博士の講演会があつた。デイはその会場に来て、当日映写係であつた僕の仕事の終わるのを待つていた。20時頃、雨の道を友人の車で東に20分、アパートに着いた。少し予定時間より早かつたせいかワイフはなかなか現れなかつた。それもそのはず、当方の舞台裏では、実家からインスタント美容師よろしく母の出張を願つて着付の最中だつた。話は前後するが、デイは出かける前に手土産を持参したいが子供は幾才かときた。いや、かくかくしかじかと伝えると今夜は遠慮するといひだした。やつと納得(?)して彼はやつて来た訳である。グラスを傾けながら、彼は25、24、23才とノブキの父親にして、おじいちゃんだという話など、夜遅くまで楽しんだ。翌朝は団地前始発の鈍行バスで時計台前停留所まで来た。約50分、大きなスーツケースを膝の上にのせ、大きな体を満員バスの中に

うずめている姿は、毎朝M君で通勤している彼にとつては気の毒だった。しかし、これも我々の生活の一つである。デイを道南旅行に送り出して、スランチャードとホテル三愛で会い、午後を藻岩山附近で過ごした。リフトを下りた彼は昇つて来るリフトにカメラを向けて何やら物色の様子だった。いわく、多分ガイドブックで得た俄か知識だろう、アイヌ人を撮りたいということだった。それと和服姿の女性が目的だとのことだった。待つことしばしでとうとう目的を達することは出来なかった。僕にそれとわかるアイヌ人は見付けられなかったし、和服姿の女性も登つてこなかった。それでスランチャードにアイヌの方はどうにもならないが、和服の方だけだつたら、多分ワイフが着ているだろうからと納得してもらつて、太陽の高い内に成吉思汗と日本酒に舌鼓を打つて、タクシーで駅前まで来た。驚いたことに、彼は3日間の札幌でのタクシーの中から市役所やら中央郵便局を当てた。

途中、恵連祭のデモに出くわしたら、あれは原子力潜水艦だろう、あれはジョンソンだなあといい、日本の学生はどう思っているかときた。僕はそれらにいちいち満足な解答はできなかったが、それよりもスランチャードが理解できるくらいの察生のモデルのでき具合に感心した。バスで団地に着いたら、ワイフは洋服だった。スランチャードの手前もあつて、何とか着てくれと云つたが、とても帯は結べないということだった。隣のK夫人のところへ一式を持って走つたがとても駄目ということ、階下のA夫人のところでは、家は男の子ばかりでもう何年も着物を着たことがないので駄目という話。管理人のM夫人も自信がないとあつて、とうとう我々の努力は空しくなつた。これをスランチャードにしどろもどろ説明したが、彼の怪訝相な顔を今でも思い出す。

。一体彼はどう解釈したのだろうか。帰国して奥さんに何と日本の印象(?)を話したのだろうか。それよりも何よりも帯を結べるということは女性の必須科目(?)ではないのだろうか。それとも亭主達の必須科目なのだろうか。

シェーファ博士のこと

北大地球物理 樋口 敬二

札幌セミナーの終つた6月2日の夜、道新ホールでは、シェーファ博士の一般講演が開かれた。演題は、「雨を降らせる話」。現在、この題で語るに、これ以上の人はない。

東見教授のたくみな通訳で、たのしい講演会がおわると、孫野長治教授が立つて、しめくくりの言葉を述べた。それが、なかなかふるつていた。「『シェーファ博士と中谷先生は、次の三つの点でよく以ていていると思います。オーに、どちらも、自然現象をよく観察される点です。次にその結果を、きれいな映画にして見せて下さる所です。』そして、最後に、どちらも、スキーはうまくなさそうです。』

ワーツという笑い声が、講演中の緊張感をときほぐすように、ホールに満ち、東教授から内容を訳してもらつたシェーファ博士も、ほんとうにうれしそうに笑つた。そこには、この二人に共通するもうひとつの点、あたたかい人柄がにじみ出していた。研究者の中には、業績は立派だが、その人柄がどうとも思われる人もある。しかし、中谷先生やシェーファ博士と接してみると、本当に偉大な研究者というものは、その両方の点で、すぐれていることが今さらのように感じられた。

現代の物理学界での双璧は……と考えると、

やはり、シエーファー、メイソンの両者が浮んでくる。今回、幸いその二人ともに、ゆつくり話をきく機会があつたが、それぞれが雲物理学の発展で果す役割は、全く別のように思われる。

現在、我々が、自然についてどれ位の知識を持っているかを、知ろうと思えば、メイソンにきく

といい。しかし、自然には、我々のわからないことがとれくらいあるかを、教えてくれるのは、シエーファーだろう。メイソンは、産人にすぎないが、シエーファーは名人なのである。

食事の話し話, Mason などのこと

私たちがこれまで論文を通じてしか知り得なかつた人々と、約10日間にわたつて親しく接することができたのは、ほんとにしあわせなことだつた。また私にとって、Mason, Hallett, Latham らとは5年振りの再会でもあり、とりわけ楽しい日々であつた。その会期中のこぼれ話のいくつか。

東京でのオー日午前の部を終え、Bryant らを誘つて昼食をとり、ホテルを出ようとする。たちまち12〜3人の同行者ができてしまった。彼らにとっては、帝国ホテルは高くてもてかなわないとのことである。朝食だけで600円もとられた。近くに安く朝食のとれる所がないかとも言う。あちこち尋ねてみたが、あのあたりに朝食を食べさすような店はない。コーヒークモーニングサービスすら10時頃からは、学会には間に合わない。後で聞いた話だが、会期中2度しか朝食をとらなかつたという人もいた。昼食もみていると150円位のを喜んで食べている。やはり外国でも *scientist* はつましいものである。

Mason, Fletcher など著名な学者にはじめて会つた人たちは、彼らの若いのにびっくりしたことと思う。私も6年前ロンドンではじめて Mason に会つたとき、その若いのに驚いた。その彼は、30才台で DSc. をとつたことを大へ

北大低温 小林 楨 作

ん自慢にしていた。私は研究室の奥中からいろいろ聞き出して、彼は当時まだ37〜8才と見当をつけたが、相手が女性でなくても、直接年令を聞くのは気がひけた。

学会の後、Mason は快く招きに応じて、私たちの研究室や、私の家や、また車で洞爺、登別を廻つたりして、2日程を過して行つた。最後に日航ターミナルでの別れ際に、彼は何を思つてか私の年を尋ねた。37才との答えに、彼は「私より二つしか若くないのか。」と言つて笑つた。私にとっては、彼は予想よりまだ二つ三つ若かつたのである。ちなみに Fletcher は43才だそうである。

Mason は洞爺湖畔で秘書や友人たちにために何点かのおみやげを買求めた。そして今度来るときには、2,000人分のおみやげを持つて帰らねばならないと笑つた。彼は近く英国気象台の Director General になるそうである。

ロンドンの彼の研究室で過したときには、ずいぶん尊大なやつとの印象を強くしたが、今度会つてみると、5年の才月は彼をい、意味でのボスにしたという感じを随所に受けた。



Ladies first を忘れて 北大低温 黒岩 大助

先の国際低温物理学会の札幌セミナーは関係者一同の努力で大成功だったと思う。とくにスモッグと騒音の東京セッションから解放された参加者たちは、久しぶりに清澄な空気と緑の芝生をたのしんだようである。

英語にものすごくフライドと自信を持っている人は外国人が何人きてもヘマはしないだろうけれど、小生のように自信がないとついマコついてしくじりをする。次のこともその失敗の一つである。初日、クラーク会館の映画会のあと、外国からの参加者は二手に分かれて低温研と理学部とを見学した。低温では所長の歓迎のあいさつのあと展示場の都合で見学者を4班に分けて案内することにした。各班がそれぞれ出ていったあと、フト気づくと外国参加者の婦人の一団が、手もちぶさに室の一隅にかた

まつてヒソヒソ話し合っている。しまった。Ladies first でゆくべきだったと気付いたがもうおそい。おそろおそろ最後の班に入つて一しよに見学してくれるようにたのんだ。その中の一人の品のよい婦人が「こゝは日本ですもの、Gentleman first で結構ですわ」と、ニツコリされた。これがシカゴ大学のByers教授の夫人であつた。展示場では、Byers婦人に特別くわしく説明してあげたのはいうまでもない。自由教育を受けたアフレゲールの人たちには笑い話かもしれないが戦前派はときたまこのようなミスをしがちなので用心した方がよい。

入 会 者 昭和39年8月以降

個人情報保護のため公開しておりません

転 入 者 昭和40年4月1日以降

個人情報保護のため公開しておりません